

第5章 評価書における予測結果の概要と 事後調査（供用開始後）の比較

第5章 評価書における予測結果の概要と事後調査（供用開始後）の比較

評価書における予測結果の概要と事後調査（供用開始後）結果の比較を表5-1に示す。

表5-1 評価書における予測結果の概要と事後調査（供用開始後）結果の比較（1/3）

項目	予測結果の概要	環境保全措置の実施内容	事後調査（供用開始後）結果
植 物	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響も受ける可能性があると考えられる。</p> <p>建設発生土処理場及び貯水池の出現する範囲では、本種の生育確認個体数の約63%（10個体）が消失すると予測される。また、原石山、工事用道路、付替道路及び貯水池の出現する範囲の直近では、生育個体確認数の約13%（2個体）が消失する可能性があるとして予測される。</p> <p>（評価書 6.1.7-91 頁）</p>	<p>直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。</p>	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体（13 個体）を改変区域外の移植適地に個体移植した（同時に、開花まで種の同定が困難であるカンアオイ属の一種も移植）。</p> <p>移植後に個体の活着、開花が確認された。また、カンアオイ属の一種の中からも保全対象となるミヤコアオイが3 個体確認された。調査終了段階で14 個体（移植当初比：107%）の生育が確認されており、生育状況も良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>
	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響も受ける可能性があると考えられる。</p> <p>ダムの堤体建設発生土処理場及び貯水池の出現する範囲では、本種の生育確認個体数の約78%（320個体）が消失すると予測される。また、取水工の出現する範囲の直近では、生育確認個体数の約1%（3 個体）が消失する可能性があるとして予測される。</p> <p>（評価書 6.1.7-91 頁）</p>	<p>直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。</p>	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体（75 個体）を改変区域外の移植適地に個体移植した。なお、残る約250 個体については、環境影響評価時の確認地点で再調査を行った結果、植生遷移等によって個体が自然消失していることを確認した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花と結実、移植地での再生産が確認された。調査終了段階で99 個体（移植当初比：132%）の生育が確認されており、生育状況も良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>

表 5-1 評価書における予測結果の概要と事後調査（供用開始後）結果の比較（2 / 3）

項目	予測結果の概要	環境保全措置の実施内容	事後調査（供用開始後）結果
植 物	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響は小さいと考えられる。</p> <p>ダムの堤体、建設発生土処理場、付替道路、貯水池及び取水工の出現による範囲では、本種の生育確認地点の75% (12 地点) が消失すると予測される。</p> <p>(評価書 6. 1. 7-91 頁)</p>	<p>生育個体から種子を採取し、生育適地に播種を行う。</p>	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した 2 箇所の生育地から採取した種子を含んだ約 10m³ の表土を改変区域外の移植適地に播種した。なお、残る 10 地点については、環境影響評価時の確認地点で再調査を行った結果、営農形態の変化に伴って個体が自然消失していることを確認した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花と結実、移植地及び移植地周辺での再生産が確認されており、個体の生育状況も良好と評価されている。また、調査終了段階で 10m³ 以上の埋土種子を含んだ表土が保全されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての播種（埋土種子を含んだ表土の移植）が適切に行われたと判断される。</p>
	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響は小さいと考えられる。</p> <p>原石山、施工設備、工事用道路、建設発生土処理場及び貯水池の出現する範囲では、本種の生育確認個体数の約 75% (35 群[※]) が消失すると予測される。</p> <p>(評価書 6. 1. 7-92 頁)</p>	<p>直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。</p>	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体 (17 群[※]) を改変区域外の移植適地に個体移植した。なお、残る約 20 群については、環境影響評価時の確認地点で再調査を行った結果、植生遷移等によって個体が自然消失していることを確認した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花、調査枠外への伸長生長が確認された。調査終了段階で 17 群 (移植当初比：100%) の生育が確認されており、生育状況も良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>
	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響も受ける可能性があると考えられる。</p> <p>ダムの堤体、工事用道路、建設発生土処理場及び貯水池の出現による範囲では、本種の生育確認個体数の約 20% (11 個体) が消失すると予測される。また、付替道路の出現する範囲の直近では、生育確認個体数の約 2% (1 個体) が消失する可能性があると考えられる。</p> <p>(評価書 6. 1. 7-92 頁)</p>	<p>直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。</p>	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体 (14 個体) を、改変区域外の移植適地に個体移植した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花と結実が確認された。調査終了段階で 13 個体の生育が確認されており、生育状況も概ね良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>

※オニコナスビはつる状の走出枝を伸ばして分布を広げる生態をもっており、これらが絡み合って生育している。評価書では、オニコナスビの計数方法について「オニコナスビ、ミクリ、ナガエミクリ、コガマ、ヒメカンガレイは、個体の区別が難しいため、個体数は「群」で表示した。」(評価書 6. 1. 7-27) としており、これに従う。

表 5-1 評価書における予測結果の概要と事後調査（供用開始後）結果の比較（3 / 3）

項目		予測結果の概要	環境保全措置の実施内容	事後調査（供用開始後）結果
植 物	ヒメナベワリ	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響はないと考えられる。</p> <p>建設発生土処理場の出現する範囲では、本種の生育確認個体数の 100% (7 個体) が消失すると予測される。</p> <p>(評価書 6. 1. 7-93 頁)</p>	直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体 (80 個体) を改変区域外の移植適地に個体移植した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花と結実、移植地での再生産が確認された。調査終了段階で 276 個体 (移植当初比 : 345%) の生育が確認されており、生育状況も良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>
	エビネ	<p>本種は、対象事業の実施により、直接改変による影響を受け、直接改変以外の影響は小さいと考えられる。</p> <p>原石山、建設発生土処理場及び貯水池の出現する範囲では、本種の生育確認個体数の約 21% (41 個体) が消失すると予測される。</p> <p>(評価書 6. 1. 7-93 頁)</p>	直接改変の影響を受ける個体の移植を行う。	<p>直接改変を受ける箇所に生育していた個体については、事前の環境巡視等で確認した全ての個体 (566 個体) を改変区域外の移植適地に個体移植した。</p> <p>移植後に個体の活着、開花と結実が確認された。調査終了段階で 454 個体の生育が確認されており、生育状況も良好と評価されている。</p> <p>以上より、環境保全措置としての個体移植が適切に行われたと判断される。</p>